音楽を通した国際理解の実践

前北京日本人学校　教諭
兵庫県豊岡市立豊岡北中学校　教諭　大　江　　昇

キーワード：国際交流，現地理解，中国民族楽器，我が国と中国の伝統的な音楽

1．はじめに

北京は2008年オリンピックの開催地ということもあって，近年これほど世界中に注目された国（都市）も少ないであろう。赴任中の３年間は高層ビルの建設ラッシュだった。現在の北京は，人口1400万人近くある。北京語は中国の共通語である「普通語」に近いが，巻き舌音が強く，慣れないと聞き取りにくい。北京日本人学校は2007年11月４日には創立30周年式典を行った。学校の所在地は天安門のある中心部から首都空港方面の北東に位置し，学校の横を机場（空港）高速が通る軽便な場所である。小学部・中学部の２部からなり，子どもの数はこの３年間で500人台から700人台にまで増加した。派遣教員数は10年前の20人から30以上となり，現地採用の教員を合わせ約50の教員で教育活動を行っている。

平成20年１月に中国楽器履修生徒によって演奏会が実現

特徴の一つとして在外教育の利点を生して，中国語・英会話の授業が充実していることがあげられる。小１から中３までの全クラスで実施，「大地の時間（総合的な学習の時間）」等において現地校との交流で身につけた会話力を発揮する場面を意識的に設定し，子どもたちのモチベーション高揚の一助としている。北京は首都ということもあり，少数民族文化を含む中国文化圏はもちろんのこと，他の言語圏との国際交流・現地理解の機会にも多く恵まれている。北京は比較的，古い文化や習慣を大切にしていく傾向が強い。そのため，市内には優れた書家，画家などが数多く，活動を続けていて，現在も中国の伝統文化に誇りを持ちながら，その技術を継承している。民族楽器の演奏者も例外ではなく，中国全土で日常的に演奏活動を続けている老師達は北京を拠点においている。北京日本人学校が各楽器の専門家を外部講師として学校に招くことができたのはこのような条件に恵まれたからである。その結果，子どもたちは本物の音を聞き，本物の中国語でプロの講師（以下老師）から指導を受けることができた。実践例の一つはこの中国楽器の学習についてである。

もう一つは，日本・中国双方の伝統的な音楽の組み合わせによる学習教材（楽曲）を使った例である。人口13億人の中国国民の誰もが口ずさむ曲がある。その１つが「茉莉花」であり，60年以上前に「鮮花調」という曲を，南京六合金牛山のふもとで現地の民間芸人が歌っていたのを，同地で民謡採集をしていた音楽家の何攸氏が見出したものである。「鮮花調」からインスピレーションを受けた「茉莉花」は全国的なヒット曲となった。花を歌った曲として，日本で言えば「さくらさくら」にあたる。北京オリンピックにも多く登場した「茉莉花」と日本の「さくらさくら」を教材として，また国際交流の場でのテーマとして使う試みを行った。

以上の２つを主にして「音楽を通した国際理解の実践」として報告する。

２．中国楽器の履修を通した国際理解

(1) 対象者，活動の時間及び場所

週２時間設定されている選択Ⅱ（実技系）の時間に中学部１年から３年の生徒が活動している。平成18年度より開講。開講１年目は19人，２年目では29人が参加した。

(2) 指導者

音楽専科教諭及び４名の中国人外部講師

笛子，二胡，楊琴，古箏，琵琶にそれぞれ専門の老師が１人ずつついて指導する。個人レッスンの後，音楽室で合奏の練習。笛子の老師は王先生で演奏者としての活動が忙しいため，もう１人の若い老師が代わりに来ることもあった。二胡の崇老師は舞踊の素養もあり，中国音楽の起源などにもふれながら生徒達をていねいに指導している。楊琴の老師も演奏活動のある時は，代わりの老師が来てくれた。琵琶と古箏は若い女性の老師が指導を担当し，中国語の達者な生徒は音楽以外についても会話が弾んでいたようである。音楽専科の私は主に老師と学校との連絡と調整を行っていたが，フルートが専門だったので笛子を生徒といっしょに習っていた。帰国までに買い集めた笛子は10本以上になっていた。

(3) 現地校との交流

北京市内にある「定福庄第二小学」は毎年，全中国の民族楽器によるコンクールで上位入賞者を排出している民族楽器指導の先進校である。オリンピック前のイベントに数多く出演しているので交流も手慣れていた。

平成19年の10月に初めて本校の中国楽器履修生徒が訪問させてもらい，交換演奏などの交流を持つことができた。演奏のレベルは全くかけ離れていたが，定福庄第二小学の子どもたちの華麗な技術を目のあたりにして生徒達の学習への意欲が大きく高揚した。「演奏の技術は関係ありません。私たちは日本の子どもが中国の民族楽器を学ぼうとしていることが何よりうれしいのです。」何よりも現地校の老師の励ましの言葉は生徒達の心の奥に深く響いたようである。

(4) 北京の伝統楽器に対する人々の関心

北京は古い物を残していこうという意識が随所に感じられる都市である。昔から欧米の文化を受け入れてきた南方の地域とは全く異なる。それだけに伝統的楽器の名だたる演奏者は北京に集まる。我が国における新しい指導要領においても「日本の伝統的な文化」に対する重点化が謳われている。北京の教育はその遙か先を進んでいるといえよう。中国の伝統楽器の優れた者は重点中学校への進学にも有利になると老師から聞かされた。何よりも多くの子どもたちが自国の伝統音楽に誇りと興味を持っている。日本の音楽教育がお手本にしてもいいところである。楽器店街では西洋楽器のことは「西洋的 xi yan de」と呼び，西洋楽器の愛好家も増えているようであるが，北京市内の音楽大学ではむしろ中国の伝統楽器に力を注いでいるようである。女子十二楽坊は世界各国で有名になっているが，そういったレベルの演奏家は桁外れに数多く存在する。自国音楽演奏者の層の厚さに驚かされた。中国の国土と同じように北京の各公園も広大な面積を持っている。毎朝，夕になると二胡や笛子を手にした市民が公園にやってきては数曲演奏して帰っていく。人々は太極拳やジョギングをするように楽器を演奏する。まさに「生涯を通じて音楽を愛好する」姿であった。北京日本人学校の子どもたちも近くの公園で，そのような風景を見ながら生活し，保護者も理解している。故に中国楽器の履修者も増えているのだと考える。

(5) 理論的，系統的な指導方法

これだけたくさんの子どもたちが自分たちの国の音楽と楽器を愛好するには，指導者の数も確保されなければならない。ところが楽器店の店長はすべて師範級の演奏者である。北京は指導者にとっても激戦区である。北京日本

人学校に指導に来ている老師の指導はすべて中国語によるレッスンであったが，どの老師もたいへん指導力が卓越している。初めて楽器をさわる生徒達でも，あきさせることなく，指導してくれる。「現在のあなたの問題点は肩に力が入っていることです。そういう時にはこのように軽くたたきましょう。（楊琴）」目に見えない音を言葉で指導する難しさは東西を問わない。しかし，老師達の指導では理論的でかつ，明快な説明が用意されていた。生徒達の中には中国語初心者の者もいたが，中国語上級者が正確に通訳しており，楽器のレッスンが中国語のトレーニングの場にもなっていた。老師達の指導力レベルの高さは生徒達が意欲を持って取り組む姿にはっきりと表れていた。

(6) 年間のカリキュラムについて

教育課程の中では「選択教科音楽」となっている。在外教育施設は独自の教育課程の編成が可能であり，今後は「総合的な学習の時間」や必修音楽の時間の中での実施も考えることができる。

北京日本人学校では，年間を35週で計算し，選択教科の時間は週２時間，水曜日の５，６校時に設定した。講師は年間35回中，20回来校できるように予算化してある。

４月の第１回目の授業では選択中国楽器の老師チームによる演奏会を行い，楽器の紹介をしている。さらに２回，楽器体験の時間をとって１年間通じて履修できることとした（平成17年度は前期，後期別に履修）。

(7) 楽器の準備及び父母会の協力について

民族楽器を履修するにあたっては，先ず楽器が必要となる。笛子は生徒用に200元～400元（3000円～6000円）で個人別に購入した。笛子の老師が選定したり，私が楽器展示会などで直接購入した。古箏は赴任時にすでに備品として音楽室にあった。裏板にひびが入っていたので木工ボンドで修理した。北京は乾燥が凄まじいので木工ボンドは音楽室の必需品である。ちなみに北京市内でなら古箏は新たに購入しても500元～1000元で手に入り，安価な物でも音色には遜色はない。楊琴は１年に１台5000元で購入し，２台そろえた。琵琶も１台購入したが，演奏会当日に倒してバラバラに壊れ，再購入した。二胡のパートは最多人数で学校の備品だけでは足りないが，個人で所有している人も多かった。また，週１回発行していた音楽室だよりに「協力求む」の旨の記事を載せたところ，楽器を貸してくれたり，帰国前に寄付してくれる家庭も出てきて，学校の父母会全体が中国楽器の履修を応援してくれる雰囲気が出てきた。さらに，父母会の中にはボランティアで通訳や指導をかって出てくださる方もあり，だんだんと学習の能率もあがってきた。

３．日本と中国の伝統的な音楽を使った国際理解

(1) 各学年の現地理解教育・国際理解教育の推進について

- 小学部低学年：花家実験小学との交流で自己紹介，名刺交換，日本の遊び，中国の遊び，歌と踊り相互発表，校内見学，綱引き大会等を行う。市場など現地見学は年間のべ５回ほど。
- 小学部中学年：五路通小学との交流で合奏・合唱の発表，伝統芸能などの文化交流，スポーツ交流，グループ交流など。現地理解はロッテ工場見学，日本のODA事業など。
- 小学部高学年：上海チチハル第１小学との交流。オリジナル曲「北京の奇跡」の発表，文化交流。スポーツ交流。韓国国際学校との文化交流。器楽合奏の演奏。両国の遊びの紹介。
- 中学部：成都市塩道街中学との交流。両校の文化発表。グループ交流。中国語の合唱発表。第20回になる国際交流弁論大会にて相手国の言語で弁論を行う。ここでも中国語で合唱。

(2)「北京の奇跡～茉莉花と櫻花の出会い～」

前述の小学校高学年で使用した「北京の奇跡」は「茉莉花と櫻花の出会い」という副題を持つ自作の器楽合奏曲

韓国国際学校で「北京の奇跡」韓国でも茉莉花は有名

である。双方のモチーフを交互に使い，韓国国際学校，現地の小学校，修学旅行先の上海現地校などで文化交流の際に演奏した。中国の現地校が文化交流の際に披露してくれたのは主に校内の優秀児童による古箏など代表選手の演技である。「一人一役，全員で作り上げる音楽」を軸に進められる日本の音楽教育とのちがいに日中双方の教師が注目した。特に様々な楽器を持ち寄って中国の曲や日本の曲を演奏する日本人学校の様子を見た現地校の老師は「日本の音楽教育は全員が分担して，かつ１つの曲を演奏していることがすばらしい。これからは私たちもこういった分野を研究していきます。」と述べた。

(3) 現地の音楽を教材として用いることについて

在外教育施設では，現地に伝わる伝統的な音楽を国際理解の方法として使いたい。子どもたちはその国の旋律を演奏することで，街に流れている曲が自分たちの演奏している音楽であることに興味を持つであろうし，現地校との交流では相手の子どもたちに間違いなく大歓迎される。音楽に国境はないとは使い古された言葉ではあるが，まさに体験的に交流に音楽を用いることになった例であろう。

(4) 方法としてのアレンジ

現地の音楽や日本の曲をそのまま使用することは問題がない。むしろオリジナルの演奏形態を体験する方が好ましいとも思う。しかし2007年にはオリンピックに向けた交流イベントが多く，「ちょっと派手目」に盛り上がる必要があったため，編曲の必要をせまられた。また，在学教育施設の特質か北京日本人学校がそうなのか，子どもたちは様々な楽器を特技として音楽室にやってくる。フルートの吹ける子，サクソフォンの吹ける子，バイオリンの弾ける子など，それらの特徴をふんだんに取り込んで演奏するには，編成にあったアレンジをしなければいけなくなった。アレンジに使用したソフトはFINALE2004である。アップグレード版もあったが音源の音質はこちらの方が良かった。2006年小学部６年生器楽合奏曲「北京の奇跡Ⅰ」同じく2007年「北京の奇跡Ⅱ」それぞれのダンスバージョン，運動会入場行進曲「未来への翼」，「ゴーゴーゴー」の第３チーム曲「青組の歌」などをアレンジした。音源として残せるので使い勝手の良いソフトである。

４．おわりに

奇しくも2008年のオリンピックが終わった８月末に実践報告を作成していることに，不思議な関わりを感じている。オリンピックに向けて日中間の交流や国際理解の機会が多く催され，そのような場でいかに音楽が重要な役割を持っているかをはっきりと認識することができた。もちろんオリンピックの終わったこれからもそうであろうし，中国以外の国々との関わりにおいても音楽が国際交流や国際理解に及ぼす影響やその果たさなければならない使命は大きい。毎年，国際交流弁論大会で中学部全員が「朋友」という曲をハーモニーをつけて合唱している。中国の人々の誰もが知っている曲であるが，日本の中学生がこの曲を朗々と合唱する姿に驚き，すぐに交流の雰囲気ができあがるのである。これからも音楽が国際交流や国際理解の助けとなって世界の架け橋となることを願っている。